

巻頭言

電気関係教室の皆さんに期待する

昭和34年卒 名誉教授 上田 院 亮



今回、歴史と伝統および実績のある京都大学電気関係教室技術情報誌の巻頭言の寄稿にあたり、適正さの欠如を自覚している吾身に多大な重圧を感じながら筆を執っている。昨年の大災害以来、今まで以上に何事についても曖昧模糊とした予測困難な時代に突入したと感じている。斯様な時代において、如何にして大学が生涯学習力と主体的な考察力を育成しうるのか、についての審議が中央教育審議会大学分科会、大学教育部会でなされ、そのまとめが去る三月に公刊された。

まず、内容の一部を筆者なりに要約させて頂く。予測が困難な時代と大学の責務について、近年大学の教員は教育に多くの時間を割き、授業（講義）改善の工夫も進んでいるにもかかわらず、国民、企業そして学生自身の学士課程教育に対する評価は総じて低いと言わざるを得ない、と厳しく評価されている。背景には、大学に対して社会の期待が従来とは質的に異なる形で高まっていることや、進学率の増加の中で学士課程教育の質の保証が要求される事情の存在が指摘されている。

つまり、経済のグローバル化、少子高齢化、情報化といった急激な社会の変化の中で、労働市場や産業・就業構造の流動化の時代を生きる若者や学生にとって、大学での学修が次代を生き抜く基盤となるか否かは切実な問題であるが故、変化に対応したり未来への活路を見いだしたりする原動力となる有為な人材の育成が大学に求められる。

かつ、大学には機能別分化を進めつつ学士課程教育の質を如何にして高めていくかが高等教育政策の中心課題であり、若者や学生の「生涯学び続け、どのような環境においても“答えのない問題”に最善解を導くことができる能力」を育成することが、大学教育の直面する大きな目標であると報告している。学生の思考力や表現力を引き出し、その知性を鍛え、課題の発見や具体化からその解決へと向かう力の基礎を身につけることを目指す能動的な授業を中心とした教育が保証されるよう、質的に転換する必要が学士課程教育に求められ、これこそまさに喫緊の課題とされている。

次に、筆者の読後感に移る。個人的には問題点を整理し抽出されたことは評価したいと思う。しかし、いざそれらの実践となれば、教員の質の向上が前提となり、一朝一夕に叶うことでないと感じた。この問題は大学以前の教育のあり方、つまり国家百年の大計に繋がるものであり、大学の教育では時すでに遅し、と思えるからである。小学校の教員を社会から尊敬され、若者の憧れの職業にすることが、わが国の将来にとって最大の幸せをもたらしてくれるもの、と確信している。さらに大学の、教員の質の転換を判断し、評価する基準は、既成のパラダイムでしか行なうことが困難なことに恐怖感を抱いた（教学マネジメント、ガバナンスについては触れずに置く）。理系の学士課程教育の質的向上が求められることに異論を唱えるつもりは毛頭ない。しかし、良質の教育には教育者の品性が最も重要であり、学生は品性ある教育者の背中を見て育つのでないだろうか、と信じている。ITを駆使し、（見せ掛けの）効率を競うのではなく、（泥臭い）肌身に伝わる肉声を以っての以心伝心が大切だと思う。その観点では、学生さん達にとって電気関係教室は切磋琢磨のTPOとして国内では稀有の環境であることを自覚させ

ることが喫緊の即実行可能策と感ずる。言うまでもなく、報告書は、国内すべての大学を対象としている。

さらに言えば、審議のまとめに書かれていることは、概ね尤もなことだが、近年教員が本来業務を真摯に行うのに、（不要とまでも言えないが）形式を整える儀式的雑務に如何ほど貴重な時間が割かれ本来業務遂行の妨げになっているのではないだろうか、との危惧の念が増大するこの頃である。教員にも一日は24時間で、万能でない。講義・実習・研究指導に加え、研究面では対外的、国際的ライバル間との競争にしのぎを削って行かねばならない、などなどの現状認識が欠けているように感じた。

筆者は人生大半の45年間を電気系学科で過させて頂いた。在学・在職時は国立大学だったので、その延長線上で現状を覗いていることは止むを得ないが、ここから現在電気関係教室構成員の皆さんへ、常日頃感じている期待を記させて頂きたい。

電気関係教室の教員には己の良識と信念に忠実に毎日の貴重な時間を真摯に費やして頂きたい。学士課程の学生には、internetでの検索能力を磨くより、物事の本質を察知、理解、咀嚼し、理解達成度を仲間との切磋琢磨で確認しあうことに励んで頂きたい。修士課程の院生には、研究課題は指導教員が長年培って来られた問題に触れさせて頂いていることを自覚し、高利息を付けてお返しする積りで日々研鑽を心がけて頂きたい。博士課程の院生には、一人前の研究者であるとの気概をもって研究に没頭して頂きたい。時代の移ろいとは言え、若手教員数が減ったことは、わが国が将来にかけける夢が減ったことと感ず、任期・短期間の成果の要求…は目先の答えが分かる（真の研究に値しないような）課題しか見えなくなっていき…、夢を壊しているのでは…、との危惧の念が膨らんでいる。

修士課程の院生には、気に障るであろう記述を行った。それは、研究課題の設定が如何に困難かつ重要なことかを自覚していただきたいからである。factoryでなくlaboratoryでしか行えない研究課題・環境を学生達に与えることが、担当教員の重要な責務である。通常、修士課程の成果は院生自身のみならず担当教員が対となって評価されている。

よく使われる実学・虚学の定義、ならびに線引きは定かでない。しかし、真の実学は大学で為され得るのだろうか。「研究とは所詮、遊び心（知的好奇心）の具現化の過程である」とは過言の極みかもしれない。が、上記の本来業務と表した文言の真意は、職位と周囲事情によって異なるだろうが、電気関係教室の教員さんは正確に理解して下さるものと信じている。冒頭に引用した類の、世の中の流れに過度に捕われることなく、更なるご発展を祈念し拙文を閉じたい。